

おそろしう密柑喰ふたる蚊遣かな (存義)
明樽やおもへば腹のおそろしき (逸名)

改過と遷善

過ちては改むるに憚ること勿れ (論語)
過ちて改めざる、之を過といふ (同上)
過ちて能く改むるは、善の大なるものなり (孝經、漢書)
古の君子は過てば則ち之を改む (孟子)
能く過を改むれば、則ち天地怒らず (聯瑾)
善を見ては則ち遷り、過あつては則ち改むを大勇といふべし (浩覺山)
善を見ては及ばざるが如く、不善を見ては湯を探るが如くせよ (論語)
善に遷ることは、當さに風の速かなるが如くなるべし (朱子)
善に行ふことは登るが如く、惡に従ふことは崩るゝが如くせよ (晉國語)
惡は小なるを以て之を爲すことなかれ、善は小なるを以て爲さるることなかれ (蜀)

漢、昭烈帝)

かひなしやけふはきのふの過を

思ひしりてもあらためぬ身は (前内大臣實隆)

ぬば玉のくらしあたりも天地の

神はみまますぞ人は見すとも

瓜生にはくつをないれぞ瓜ぬすむ

人とも見えばくやしからまじ

よき道にうつり行かんは足引の

あらしの風に似すべきものぞ

天つ空てる日の本にありながら

くもる心の隈をもためや (以上、妻語歌)

克己

己れに克ち、禮に復るを仁と爲す (論語)

勝ち難き者は、己が私に如くはなし、學者能く之に克つは大勇にあらずや（程子）
己れに克つは固より學者の急務、亦須らく一切の道理を見得し了る分明なるべし、
方さに日用の間、一言一動、何者かこれ正、何者か是れ邪なるを見、便ち此處に於
て脚跟を定立せよ、凡そ是れ私に、是れ天理ならざる者は便ち克く將ち去れ（朱子）
己れに克つは、須らく性偏の克ち難き所より克く將ち去るべし（謝上蔡）
戦ひて敵に勝つよりは、己が熱情に勝つ者は、反て眞の大勇なり（トーマスブラウ
ン）

自ら己を制して情慾、希望、恐怖を管理する人は帝王の上（ミルトン）
克己を教へよ、之を行ふを愉快とせよ、然らば汝は曾て漠然たる空想者の腦裏より
發せる運命よりも、一層高尚なる運命を世界の爲に造る事を得ん（スコット）
己れを制する人は最も強し（セネカ）
大事は力に依てよりは、不屈不撓に依て成る（ジョンソン）
謙遜

天道は盈つるを虧きて謙に益し、人道は盈つるを惡みて謙を好む（周易）
満は損を招ぎ、謙は益を受く（尙書）
良賈は深く藏して虚なるが若し、君子は盛徳なるも容貌愚なるが如し（史記）
我が尊を謂ひて賢を傲り、士を慢ること勿れ、我が智を謂ひて諫を拒み、己れに矜
ること勿れ（大寶箴）

石は玉を韞んで山暉き、水は珠を懐いて川媚ぶ（陸機文選）

子貢曰く夫子は温良恭儉讓（論語）

謙は美德なり、謙に過ぐる者は詐多し（聯珠）

自ら謙なれば、則ち人愈々服し、自ら誇れば則ち人必ず疑ふ（紳瑜）

我が無識を證するは、我が知識に誇る者なり（英國俚諺）

傲慢は敵を増し友を逐ふ（同上）

傲慢は家を出づる時は馬に乗るも徒歩にて歸る（獨逸俚諺）

敵を侮る者は速かに撃たれん（葡萄牙俚諺）

のさし出る鋒先をれよものごとくに

おのが心を鐵槌にして (鈴木正三)

道の邊の槿は馬に食はれけり (芭蕉)

雪持ちし力を見せぬ柳かな (富水)

剛毅

君子は獨立して懼れず (易經)

勇者は懼れず (論語)

義を見て爲さざるは勇なきなり (同上)

士は以て弘毅ならざるべからず、任重くして道遠し、仁以て己が任となす、亦重か

らずや、死して後已む亦遠からずや (同上)

發強剛毅にして以て執る事あるに足る (中庸)

事に臨んで屢々斷ずるは勇なり (禮記)

富貴も隱する事能はず、貧賤も移す事能はず、威武も屈する事能はず、此れ之を大

丈夫といふ (孟子)

大丈夫はしかまつ事のあればこそ

しげき歎きも堪へ忍ぶらん (藤原俊成)

憂き事の尙ほ此上につもれかし

限りある身の方ためさん (熊澤蕃山)

果斷

唯だ克く果斷なれば乃ち後艱なし (書經)

果決の人は忙に似たれども、心中常に餘閑あり、因循の人は閑に似たれども、心中

常に餘累あり (紳瑜)

猶豫は時の賊なり、年々時を奪ひ去りて、遂に瞬時を餘さるに至る (ヤング)

猶豫は危険なる最後を有す (シエークスピア)

一事晩きに失すれば、萬事皆之に倣ふ (ケート)

爲すべき事は必ず即日之を爲せ (アーシアス)

猶豫を退けよ、猶豫は常に準備を整へるものを害す（ルーカン）

誠實と正直

萬物皆我に備はれり、身に反して誠なれば、樂しみこれより大なるはなし（孟子）

所謂其の意を誠にするとは、自ら欺くなきなり（大學）

誠の至りや、金石之が爲に開く、汎んや人をや（劉向）

十目の視る所、十指の指す所、其れ嚴なるかな、富は屋を潤ほし、徳は身を潤ほす

心廣く體胖かなり、故に君子は必ず其の意を誠にする（曾子）

誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり（中庸）

誠は物の終始、誠ならざれば物なし、是故に君子は之を誠にするを貴と爲す（中庸）

至誠にして動かざる者は未だ之れあらざるなり、誠ならずして未だ能く動く者あら

ざるなり（孟子）

詭詐の人、變幻百端測度すべからざるに遇へば、吾れ一に至誠を以て之を待せよ、

彼の術自ら窮せん（紳瑜）

其の身正しければ令せずして行はれ、其の身正しからざれば令すと雖も、従はず。

（論語）

諸葛孔明曰く、我が心秤の如し、人の爲に低昂を作す能はず（揚升庵）

天地に私なし、善を爲せば自然に福を獲（聯瑾）

蓮葉の濁りにしまぬ心もて

何かは露を玉とあざむく（僧正遍照）

八百のうそを上手にならべても

誠一つにかなはざりけり（拙堂和尚）

用心

衆之を惡めば必ず察せよ、衆之を好むも必ず察せよ（論語）

其の以てする所を視、其の由る所を觀、其の安んずる所を察せば、人焉んぞ廣さん

や（同上）

君子は始を慎む、差毫釐の如きも誤まるに千里を以てす (易經)
 苦心の中、常に悦心の趣を得、得意の時、便ち失意の悲みを生ず (菜根譚)
 恩理由來害を生ず、故に快意の時須らく早頭を回すべし、敗後或は反て功を爲す、
 故に拂心の處、便ち手を放つべし (同上)
 人に六の悔あり、(一)官に在つて曲り職を失ふ時悔ゆ(二)富時に儉約を用ゐず、貧
 になりて悔ゆ(三)藝を學ばず、勤に至つて悔ゆ(四)見て學ぶ事を學ばずして、用
 る時に悔ゆ(五)醉時の狂言醒めて後ち悔ゆ(六)常に不養生にして病める時に悔ゆ。
 (商人生業鑑)

五用心

(一)火の用心と堪忍大明神を信すへし。

脇坂義堂

つゝしめよはたる程なる煙草の火

心ゆるせば早がねの聲

恐るべしぐちと短氣の胸の火が

我れとわが身をこがすやきもち

(二)非の用心 家業如來を信すべし。

よこしまの非をばおそれて正直を

守る人をば神や守らん

恐るべし非がふりかゝり困窮は

己が非道の非がせむるなり

(三)色の火用心 禮節大明神を信すべし

恐るべきものは色ぞと慎みて

手あやまちすな用心をせよ

慎みを人の心の根とすれば

言葉の花もまことにぞ咲く

(四) 邪の非用心 正直大明神を信すべし
恐るべし是を是とせざる邪は

己が身をやく非にぞありける
正直の神はやどるぞ頭から

足のさきまで無理非道すな
(五) 慾の火用心 知足大明神を信すべし

恐るべし慾のほははげしくて

我身も家も人もやくなり

足る事をしりからげして身を軽く

慾のうすきに福と壽はあり

五用心

海川で乗りいそぎすな積雨に

手島堵庵

山と沖との鳴るは大事よ

よくきげよ螢ほどなる煙草の火

心ゆるせば早がねの聲

意必固我もとなきものをこしらへて

凡夫頭巾をかぶるかなしさ

手あやまちし易きものは色と酒

身用心せよこれぞこわもの

稻荷山木の葉に待てるこぼれ松

手にもしぐれの音ぞしてぬる (周防内侍)

宿引の嘘のはげたる寒さかな (石井貞鷲)

茸狩やぬく手を縫ひしこぼれ松 (嘯月庵)

廉耻

其の義にあらず、其の道にあらざるや、之に祿するに天下を以てするとも願みず、

乃至一介も以て人に與へず、一介も以て諸を人に取らず (孟子)

富と貴とは、是れ人の欲する所なり、其の道を以てせずして之を得ば處らざるなり、貧と賤とは人の惡む所なり、其の道を以てせずして之を得ば去らざるなり (論語)

不義にして富み且つ貴きは浮雲の如し (論語)

澹泊の士は必ず濃艶の者に疑はれ、儉約の人は多くは放肆の者に忌まる (菜根譚)

貧は乃ち士の常、貧にして能く樂む、清淨の福我よく之を受く (聯瑾)

眞廉は廉名なし、名を立つるは正に貧なる所以なり (菜根譚)

董仲舒曰く、其の義を正して其の利を謀らず、其の道を明かにして其の功を計らず (前漢書)

仕官は常に其の不遇を以て之に處せば、即ち無事なり (王漁之)

松ケ枝の直な心を保ちたし

柳の糸のなびく世の中 (大岡忠相)

自重

人當さに自信自守すべし、之を稱譽し之を承奉すと雖も、亦之が爲に喜びを加へず

之を毀謗し、之を侮慢すと雖も亦之が爲に沮みを加へじ (從政名言)

達人は自我を貴ぶ (謝靈運)

高山に昇らざれば天の高さを知らざるなり、先王の道を聞かざれば學問の大なるを

知らざるなり (大戴禮)

仁義忠信、善を樂んで倦まざる、此れ天爵なり、公卿大夫は此れ人爵なり、古への

人、其の天爵を修めて人爵之に従ふ、今の人は其の天爵を修めて以て人爵を要む、

既に人爵を得て其の天爵を棄つ、則ち惑へるの甚だしきものなり、終に亦必ず亡び

て已まん (孟子)

雲よりも高き所に出で、見よ

何とて月に隔てやはある (夢窓國師)

かたちこそ深山かぐれの朽木なれ

心は花になさばなりなん (逸名)

よしあしを知り得ぬ人のほむるをも

嬉しと思ふことのはかなさ (逸名)

何のその百萬石はさゝの雪 (一茶)

何の木の花とはしらす匂ふ哉 (芭蕉)

開悟

人生を開悟して見れば、苦もなく樂もなく、貴もなく賤もない。唯だ己が天職を盡して一生を送るがよい、而して超然として宇宙と共に悠々たることの出来るのは、全く修養を積める功である、人は誰しも此の開悟の域に達せねばならぬ、それには心身の修養が第一である、左に古人の遺訓や壁書を尋ねて、其の趣を観察することとしませう。

遺訓

豊臣秀吉

一、よくをばなるべし

一、女に心ゆるすな

一、人と物をあらそふな

一、あさ寝するな

一、何事も人なみになれ

一、身の行末つゝしむべし

一、何事もつくづく物ひげすな

一、物に退屈するな

露とおき露ときえぬる人の世や

難波のことは夢のまたゆめ

遺訓

徳川家康

人の一生は重荷を負て遠き道をゆくが如し、いそぐべからず、不自由を常と思へば不足なし、心に望起らば、困窮したる時を思ひ出すべし、堪忍は無事長久の基、いかりは敵と思へ、勝事ばかり知て、まくる事をしらざれば、害其の身にいたる、おのれを責て人をせむるな、及ばざるは過ぎたるよりまされり。

壁書

徳川光圀

苦は樂の種、たのしみは苦みの種と知るべし、主人と親は無理なるものと思へ、下人は足らぬものと知るべし、恩を忘るゝ事なかれ、子程に親を思へ、子なきものは身にくらべ近き手本とすべし、掟におちよ、火におちよ、分別なき者におちよ、酒

と色とは敵と知るべし、朝寢すべからず、分別は堪忍なり、小なる事は分別せよ、大なることは驚くべからず、九分に足らば、十分にこぼるゝと知るべし。

壁書

小早川隆景

- 一、おもしろの春雨や、花のちらぬほど。
- 一、おもしろの儒學や、武備のすたらぬほど。
- 一、おもしろの武道や、文學をわすれぬほど。
- 一、おもしろの酒宴や、本心を失はぬほど。
- 一、おもしろの遊樂や、辱をとらぬほど。
- 一、おもしろの好色や、身をほろぼさぬほど。
- 一、おもしろの利慾や、義理の道ふさがらぬほど。
- 一、おもしろの權勢や、他にはこらぬほど。
- 一、おもしろの釋教や、世理を忘れぬほど。

諸士への訓諭

加藤清正

一、奉公の道、油斷すべからず、朝寅の刻に起き、兵法をつかひ、食を喰ひ、弓を射、鐵砲を打ち、馬に騎るべし、武士は嗜よきものは、別して増し加へ、遣ふべき事。

- 一、遊びに出づべく候は、鷹野、鹿狩、相撲、かやうの儀にて遊ぶべく事。
- 一、衣類の事、木綿つむぎの類たるべし、衣類に金銀を費し、手前ならざる旨申す者曲事たるべく候。不段、身の上相應に武具を嗜み、人を扶持すべく、軍用の時は、金銀を遣ふべき事。
- 一、平生傍輩つき合、客一人亭主の外は話し申す間敷候、食は黒米飯たるべし、但し武道修行のときは、人數多く出會ふべき事。
- 一、軍禮の法は、侍の存知べき事、入らざる事に美麗を好む者、曲事たるべき事。
- 一、亂舞一圓堅く停止たり、太刀とれば人をきらんと思ふ、萬事は精神の置所より生ずるものにて候間、武道の外、亂舞稽古の輩、切腹を加ふべき事。
- 一、學問の事に精を入れ、兵書を読み、忠孝の心掛専用たるべし、詩聯句歌をよむ

事停止たり、心に華奢風流たる手弱き事を存候へば、如何にも女のようになる者にて、武士の家に生れては、太刀とつて生死すべき道を知るべく義本意なり、常に武士の道は吟味をせざれば、いさぎよきことはならぬものにて候間、能々心を武にきはむること肝要に候事。

右の條々晝夜相守るべく候、若し右の箇條勤め難き後輩の者有之に於ては、暇を申遣すべく、吟味を遂げ、男道者にならざる印を付け、追放すべく候疑あるべからず、依て件の如し。

壁書

伊達政宗

仁に過ぐれば弱くなる、義に過ぐれば固くなる、禮に過ぐれば詔となる、智に過ぐれば嘘をつく、信に過ぐれば損をする。

氣長く、心穩かにして、萬に儉約を用ゐて金を備ふべし。儉約の仕方は、不自由なるを忍ぶにあり、此の世の客に來たと思へば、何の苦もなし、朝夕の食事甘からずとも、賞めて食ふべし。元來客の身なれば、好嫌は申されまじ、今日の行お

り、子孫兄弟に能く挨拶をして、しやばの御暇申すがよし。

壁書

細川忠興

一、寄合うてよき友

正直や能者、もの書、學文や、貴人、年より、うそつかぬ人。

一、寄合うてあしき人

喧嘩好、いらぬ廣言、うつけもの、人の中言、公事たくむ人。

一、よく思はるゝ人

心よく、人事いはず、いんぎんに、慈悲ある人に、遠慮ある人。

一、憎まるゝ人

嘘つきや、人事咄し、さし出口、高慢ありて、自慢する人。

一、物の成る人

朝起や、身を働かせ、小食に、忠孝ありて、灸をたやさず。

一、物の成らぬ人

夜遊びや、朝寝、晝寝に、遊山すぎ、引込思案、油断不氣根。

一、うつけたる人
醉狂に利口がほして自慢だて、されごとふかく、あばれ喰する。

壁書

本多政信

人近く言葉すくなく、いんぎんに、知りたることも、知らぬ振して。

姪酒は早世の地形。

堪忍は身を立つるの壁。

苦勞は榮華の礎。

儉約は君に仕ふるの材木。

珍膳珍味は貧の柱。

多言慮外は身を亡ぼすの根本。

仁情は家を作るの壘。

法度は僕をつかふの屋根。

花麗は借金の板敷。

我儘は朋友に悪まるゝの障子。

右十ヶ條常に忘るべからざるものなり。

堀田正虎

家訓

日出て寢床を起き、髪を梳り、鬚を剃り、荷も空しく坐する事勿れ、夜陰と雖も文籍を離れず、雑言戯語を禁じ、好んで先哲の格言を聞き、以て座右の務とせよ。

堀田正虎は下總古河の城主堀田正俊の第二子で、享保十三年に大阪城代となり、明年正月發途し、勢州龜山に至りて死せりといふ。

壁書

徳川家宣

一、心に物ある時は、心せばく體窮屈なり、物なき時は、心廣うして體ゆたかなり

一、心に我慢ある時は、愛敬を失ふ。

一、心に慾なき時は、義を思ふ。慾ある時は義を思はず。

一、心に飾ある時は、偽を思ふ、かざりなき時は偽なし。

一、心に驕ある時は人を怨む、驕なき時は、人を敬す。

一、心に私ある時は人を疑ふ、私なき時は疑ひなし。

一、心に誤ある時は人を恐る、誤なき時は恐るゝことなし。

一、心に邪見ある時は、人をそこなふ、直なる時はそこなはず。

- 一、心に怒ある時は言葉はげし、怒なき時は、言葉和かなり。
- 一、心に貪りある時は心を諂ふ、貪りなき時はへつらひなし。
- 一、心に堪忍なき時は、物をそこなふ、堪忍ある時は物をととのふ。
- 一、心に愁なき時は悔なし、憂あるときは悔多し。
- 一、心に自慢ある時は、人の善を知らず、自慢なき時は人の善を知る。
- 一、心に迷ある時は人を咎む、まよひなき時は、とがむ事なし。
- 一、心の賤き時は、ねがひいやし、賤しからざれば、願ひなし。
- 一、心に誠ある時は、分に安んず、誠なき時は分に安んぜず。

近臣に諭す

津輕信明

一、學問といふもの高く遠く心得べからず、今日の上にある事なり、假令聖經賢傳を聞ても、身に取しめ行はずしては、何の用にも立たぬ事ぞ。今茲の物事に就いても善と悪とあり、其の善を見聞ては、何卒かやうにありたき事と思ひ、直に其の書を取り用ひて心に味ふべし、悪事を見聞ては、仕まじき事ぞと心得、恐れ慎

みの心ふまへに、心を入るれば、居住坐臥悉く學問ならざるはなし。唯だ噂のみ語り合ふ心得にては一切用に立たざるぞかし、さはいへ經書等を読むといふにはあらず、其の實を行ふ様にせよとの事なり、諺にもおかしき事あり、論語よみの論語しらすといふ事あり、皆々も知りてあるべし、併し一向に讀まざるよりは増しなるべし、論語讀の論語しらすはままだもよし、論語よますの論語知らずはとあり、然れば讀み覺えたるほどは行はずとも、一通りは通じたるはよし、一向に種なくしては仕方なし、足代さへあれば、どこまでも登る心も出来るなり、其の心の出來次第、高き處へも至る事なり。

壁書

松平定信

- 寧靜は是れ心を養ふの第一法。
- 謹謙は是れ身を保つ第一法。
- 讀書は是れ智を廣むる第一法。
- 勤儉は是れ生を治むる第一法。

含容は是れ人を待つ第一法。

慎交は是れ害に遠ざかる第一法。

安詳は是れ事に應ずる第一法。

知足は是れ樂を享くる第一法。

存厚は是れ福を召く第一法。

寡慾は是れ壽を延す第一法。

一、とふとぶべきものは人にことなる人、たふとむまじきものは、人に異なるさまの人。

一、たれりと思ふべきはわが身、足らずとしてよき物は、つとむべき道。

一、樂しきとおもふが樂しきの元なり、いかで外に求むべきと、たのしむおぎないふとぞ。

壁書

上杉治憲

左の訓言は有名なる鷹山侯が其の幼息顯孝の奥より表へ移つし時、左右詰の間へ

壁書として與へしもの也。

一、孟子は古への大賢徳の人ぞかし、斷機の嚴訓に成るとはいへども、三遷の薰陶

も淺からず、毎日朝夕の事こそ、其の浸潤は深かんめれ、人は善惡の友によると

かや、人君は左右をもて友とす、若殿の視聽は面々の言行ぞかし、心を用るよや

人々盡日の事なれば、皆斯の如くには成るまじけれど、其の大概をこゝに記して

法則にもせよとおもふもの也。

一、孝悌忠信の談

父母によく事へ、年長をうやまひ、人の事に如在なく、虚偽のなき昔ばなし。

一、恭敬退讓の談

容貌はおごそかにし、こゝろ氣ぬかさず、人をすゝめ、我身を謙したる物がたり

一、壯士義武の談

古今侍のすぢみちたりし武者物がたり。

一、大臣名家の談

本藏長尾、本柿崎などが先祖ばなし。

一、諫諍論辯の談

諫言を納れ、顔色を犯し、可を獻じ、否を替し、昔がたり。

一、農事耘耕の談

民の作業にくるしみ、さむさに耕し、あつさに耘り、粒々辛苦なる物がたり。

一、和漢名数の談

二義、三才、四徳、五行のたぐひ、或は古歌仙、八景三十六武將などの物がたり
思ひ出るまゝ、是等の物語をあらまほしき。

一、財利損益の談

金錢のさしひき、物價貴賤の物がたり。

一、淫奔潔瀆の談

男女ちだらくなる物がたり、惣てわかからの世話など。

一、飲食醉飽の談

のみくふ事を貪り、すべて調味よしあしのうわさばなし。

一、解願新語の談

かるくち、落しげなしの類ひ、妨なきに似れども、小人の聞いて濟まざるはなし。

一、奇技淫巧の談

ふしぎなる業、玉移しなどの類ひ、法に叶はぬおもひつきの細工ものゝはなし。

一、利口捷急の談

くちき、便利はつ明なるはなし。

一、巫祝呪咀の談

巫山伏の祈禱、利生方便、忌諱の類ひ。

○おもひ出るまゝ、是等の物語り遠慮あるべし。

なせばなる、なさねばならぬ何事も

ならぬは人のなさぬなりけり。

學問實行

徳川齊昭

左の訓言は水戸烈公徳川齊昭の弘道館記の一節を抄出したものである。

一、文武の藝を學ぶもの、當さに文武の道を以て本となすべし、徒に技藝の士となるべからず、天朝素と武を尙ぶ、而して近古稱する所の武士の道なるもの、節義を重んじ、廉恥を明かにし、文道なるもの、藝倫を叙で、徳業を修む、皆忠孝仁義に出でざるなければ、即ち文武歸を同うするもの、學者知らざるべからざるなり。

一、君子實行を務む、己れを修め、人を治むは仁なり、能く仁を行ふを徳行となす而して言語、政事、文學の如き、其の才の長ずる所に隨うて、以て之を行事に施す、實學にあらざるはなし、是れ學問即ち事業、未だ曾て其の塗を殊にせず、故に孔門の四教、文行忠信皆その日用實踐する所のもの、學者徒に高遠深奥を務めて、而して實行を後にする勿れ。

一、文武諸生、謹んで弟子の職を奉じ、禮讓を以て相交り、忠孝を以て相勤め、陰を惜みて勉力し、以て有用の材を成すべし。中行の士は誠に貴むべし。狂狷も亦

聖人の與する所、斐然として章を成す、進取の益亦多し、闕然として世に媚び、誤つて郷原の人となる勿れ、諧謔放肆、甘んじて無頼の徒となる勿れ、惰慢怠惰以て老後枯落の嘆を貶す勿れ。

家訓二十則

山岡鐵舟

(一)虚言いふべからず候(二)君の御恩は忘るべからず候(三)父母の御恩は忘るべからず候(四)師の御恩は忘るべからず候(五)人の御恩は忘るべからず候(六)神佛並に長者を粗末にすべからず候(七)幼者をあなどるべからず候(八)己れに快からざることは他人に求むべからず候(九)腹を立つは道にあらず候(十)何事も不幸を喜ぶべからず候(十一)力の及ぶ限りは善き方に盡すべく候(十二)他を顧みずして、自分の善き事ばかりすべからず候(十三)食するたびに稼穡の艱難を思ふべし、草木土石にても粗末すべからず候(十四)殊更に着物をかざり、或は上べをつくらふものは心に濁りあるものと心得べく候(十五)禮儀を亂るべからず候(十六)何時何人に接するも客人に接する様に心得べく候(十七)己れの知らざる事は、何人にもならぶべく候

(十八)名利の爲に學問技藝すべからず候(十九)人にはすべて能不能あり、一樣に人を棄て、或は笑ふべからず候(二十)己れの善行をほこり顔に人に知らしむべからずすべて我心に恥ぢざるやうつとむべく候。

獨立自尊

福澤諭吉

左の訓言は福澤翁の修身要領の一節を抄出したものであります。

- 一、人は人たるの品位を進め、智徳を研ぎ、ます／＼其の光輝を發揚するを以て本分となさざるべからず、吾黨の男女は獨立自尊の主義を以て終身處世の要領とし之を服膺して、人たるの本分を全うすべきものなり。
- 二、心身の獨立を全うし、自から其身を尊重して、人たるの品位を辱かしめざるもの、之を獨立自尊といふ。
- 三、自ら勞して自ら食ふは、人生獨立の本源なり、獨立自尊の人は、自勞自活の人ならざるべからず。
- 四、身體を大切にし、健康を保つは、人間生々の道に缺くべからざるの要務なり。

- 五、天壽を全うするは、人の本分を盡すものなり、原因事情の如何を問はず、自から生命を害するは、獨立自尊の旨に反する背理卑怯の行爲にして、最も賤むべき所なり。
- 六、敢爲活潑堅忍不屈の精神を以てするにあらざれば、獨立自尊の主義を實にするを得ず、人は進取確守の勇氣を缺くべからず。
- 七、獨立自尊の人は、一身の進退方向を他に依頼せずして、自ら思慮判斷するの智力を具へざるべからず。
- 八、男尊女卑は野蠻の陋習なり、文明の男女は同等同位、互に相敬愛して、獨立自尊を全からしむべし。(以下略)

國民の道徳

西村茂樹

左の訓言は西村翁主唱の日本弘道會要領甲號であります。

- 一、忠孝を重んずべし、神明を敬うべし。
- 二、皇室を尊ぶべし、本國を大切にすべし。

- 三、國法を守るべし、國益を圖るべし、
- 四、學問を勉むべし、身體を強健にすべし、
- 五、家業を勵むべし、節儉を守るべし、
- 六、家内和睦すべし、同郷相助くべし、
- 七、信義を守るべし、慈善を行ふべし、
- 八、人の害を爲すべからず、非道の財を貪るべからず、
- 九、酒色に溺るべからず、悪き風俗に染るべからず、
- 十、宗教を信ずるは自由なりといへども、本國の害となるべき宗教は信ずべからず

教訓 修養講話 終

大正四年十二月九日印刷
同年十二月拾參日發行

定價三十五錢



修養講話

著者 足立栗園
 東京市神田區駿河臺西紅梅町拾壹番地

發行者 富田能次
 東京市神田區美土代町三丁目一番地

印刷者 萩原勝次郎
 東京市小石川區久堅町一〇八番地

印刷所 博文館印刷所
 東京市小石川區久堅町一〇八番地

發行所

振替口座三三〇七番
電話本局一二六四番

東京市神田區美土代町三丁目一番地
富田文陽堂

最新刊

東京帝國大學文學科大學教授
文藝博士トドク・オ・フ・ヒソカ

中島力造先生著

道德と經濟

ポケット形天金
洋綴頗美本
定價金六十錢
郵稅金六錢

本書は我學が倫理學の泰斗たる中島博士が居常熱心唯一に考究せられつゝある倫理道德上の意見と、……近年再度の歐米漫遊により得たる實驗上の經濟道德意見とに依り、縷々として穩健着實に、而も平易適切に日本國國民としての眞面目を發揮し、斯國をして富強繁榮ならしむべき今後の良法を揭示せられたるものにして、何人も一讀して、現代に處すべき修身處世上の要訣を了し、國民としての本分を完らするを得べし。弊鋪今回幸に之を上梓して世に頒つに至れり。其學校家庭の良參考書たる言を俟たず大方諸君一讀を惜むこと勿れ

處世の大經典

文部省認定

賜天覽

育兒日記

親とこ
とろ

東京醫科大學教授
醫學博士
弘田長先生增訂
東京文科大學講師
佐々木信綱先生校
前侍醫補小兒科
小原賴之先生著

朝日新聞批評

小兒衛生は家庭に於ける最も注意すべき要件なり本書の著者は嘗て皇孫殿下侍醫たりし小兒科専門の國手にて多年の實驗と研究とを積んで此書を成せり就て閱するに在來の衛生的著書と異なり全編日記體にて一老母が十餘名の兒孫に對して病氣の看護、轉地の狀況或は衣服食物の注意等其日々の事を凡そ誕生より十年に亘りて日記に認めし如く記述し其時々の應急手當及各要項を添へたり而も文章は極めて流暢平易の上種々の面白き出來事を加へ堅苦しき理論を去つて實際親たり子たる情愛の上より説き來り自作の有益なる和歌又は風俗景色等の圖畫寫眞を挿入し宛然一編の家庭小説の如く趣味津々たる讀物となし婦女子と雖も不知不識の間に斬新なる衛生上の智識を養ふを得べし家庭の參考書として蓋し近來の好著たるを失はず

▲和綴全一冊特價壹圓拾錢郵稅拾貳錢
▲菊版形美裝五百餘頁寫眞版、木版插圖卅餘

島中士博學文 辭題家名諸

訓 教

價廉にして内容豊富

孝道講話

教育勅語の御趣旨を體し東西古今の例話を引用し先哲格言を但歌等を附し孝并に友愛の大道を詳説したれば少年子女もよく其の要旨を解すること容易なり

處世講話

權謀術數か投機射倖か非ず正直寛容勤勉節約恭儉博愛これ即ち天下無敵平和の處世法なり此の編教育勅語を基とし繁榮の基礎世間交際上の心得を説く

立志講話

成功せんとする者は須らく立志の要ありかくて修學習業智能を啓發し徳器を成就せば立身出世疑なし此書古今内外の事例を擧げ後進に資する前に同じ

修養講話

國家社會有用の人物として活動せんには平素の修養を怠るべからざるや論なし此篇よく之を盡せり

忠勇講話

列國對峙の今日一旦緩急あれば義勇奉公只に國家を富嶽の安きに置くは國民の大責任なり此篇忠愛の精神を鼓舞作興せしむる好個の指南車なり

公民講話

道義の念日に薄らぎ人心日に日に輕薄に流るゝ惡風潮を難じ人格識見品性ある眞の公民として社會に立つ道を教ふ

著新生先園栗立足 序生先造力

書 叢

萬人必讀の修養書

各册六全判六四

册共定價五錢

郵四 稅錢

青年補習讀本の完壁

■著生先綱信木々佐士博學文
■書生先蔭高山岡院學國大

■序生先洲鳳屋土學大洋東講
■編生先道修村稻

正 大
文 翰 書 年 青

正 大
本 讀 新 年 青 文 漢

半紙本和裝木版 全一册

■正價貳拾錢
■郵稅四錢

本書は日用の書翰文の實例を佐々木博士親しく撰文され、岡山高蔭大人染筆されたれば男子用書翰文の模範實例として理想的のものなり。書翰文に達するは成功の第一歩也諸君は此の新しき理想用文を座右にして時勢に遅れたまふ勿れ。

■習字兼用・書翰文の模範!!

■菊判和裝全一册定價貳拾五錢 郵稅四錢

色 特 の 書 本

○讀本の要は、多く讀ましむるに非ずして、多く讀む法を知らむるにあり。本書は中等程度の學生を標準として、漢文一般に涉る知識を得せしめんとせり。
○されば包含する所、日本近世諸大家の名文を始め、日本外史、大學、中庸、論語、孟子、文章軌範、唐詩選、史記、等古今内外の名文名詩を集め、難解なる文句には註解を施したれば、學生は本書一部を熟讀するに依りて普通漢文の智識を養成するを得べし。
○言ふまでも無く漢文は、日本文學の基礎なり。漢文の素養なくしては世に立ち難し。
○本書は實に各地青年夜學用補習用の漢文讀本として漢文の基礎的智識の習得に最も簡便にして有利なる書籍なり。

青年補習讀本

■序生先一矢賀芳士博學文
■編生先道修村稻

■序生先一矢賀芳士博學文
■編生先道修村稻

正 大
本 讀 新 年 青 等 高

正 大
本 讀 新 年 青
編 後 編 前

次 目 客 内

手腕と品性、世界人物の進歩、至誠、偶成(漢詩)、彼岸、現代的模範人物、與三諸生(漢文)吉田松蔭、題壁(漢詩)僧月性、電氣の語(一)、電氣の語(二)、光陰有餘(漢文中村正直)、孔子の好學、論語鈔、夏の歌香川景樹の歌論、藝規三則(漢文)山田方谷、明治天皇の頌徳の辭、桃山參拜記、鼓腹擊壤(漢文)、十八史略、自謙不息、今上天皇の御登極を壽し奉る、伊藤博文公誄詞、名譽、禮貌(漢文)林奎、農村美譚、惜陰軒記(漢文)中村正直、巴奈馬運河開墾の困難、格言四則(漢文)秋窓雜感、旅の心得、美果實る南洋の島、漁夫(新體詩)高崎藤村、格言數則(漢文)、釋迦の奮闘、冬の自然界、佳言三則(勤儉に關する)、正義の結晶たる文豪スコット外數章

■菊判和裝全一册定價貳拾五錢 郵稅六錢

容 内 の 書 本

新時代の青年に必要な新智識の獲得に資すべき材料は幾多既刊の類似書中最も豊富なり。其の内容は、現今の時勢、大日本帝國の現状、國體、忠君愛國、飛行機、曆法、法制經濟の概要、農工商の一般智識と夫等各階級の模範的人物の性行と教訓、世界各國の代表的人物、德育上の訓話、書翰文の作法、漢文の初歩及び趣味の養成に資すべき詩歌の類等——進歩せる教授法を應用して組織的に排列したる各材料は主として現代大家の普通文及び談話筆記を以てす——本書は實に青年補習讀本の完壁也

■菊判和裝全二册定價各貳拾五錢郵稅六錢

■足立栗園先生著

偉人修養叢書

山鹿素行修養訓

—(文部省認定)—

遠く赤穂義士を
薫陶し近頃は吉
田松陰乃木大將
が精神を陶冶せ
しめし曠世の偉
人素行の學說に
接し人格の鍛錬
一助に供す可し

本書の内容

山鹿素行傳及其學說
武教小學
爲學論
讀書論
靜坐論
力行省察

祭祀論
情欲論
自警
子弟警
御僕の警戒
天馬賦

■ポケット形美本
■洋綴全一冊
■定價金六十錢
■郵税金六錢

■足立栗園先生著

偉人修養叢書

佐久間象山修養訓

—(文部省認定)—

時事洵内外多
端の今日憂國の
志士象山先生が
字々句々血涙と
熱誠燃るが如き
筆に成れる一大
教訓を聞け

本書の内容

卷頭小傳
省侃言錄
修養論
經世論
賦類

論贊
說苑
學約象山書院學約
詩歌
逸料

■ポケット形天金
■洋綴全一冊
■定價金六十錢
■郵税金六錢

■足立栗園先生著

偉人
修養
叢書

吉田松陰修養訓

■ポケット形天金
■洋綴全一冊
■定價金六十錢
■郵税金六錢

▼文部省認定▲

□東京時事新報

□大阪毎日新聞

維新の先
驅者松陰
先生の學
力識見抱
負を窺ひ
修養の根
底を知悉
す可し

世評一斑

贈正四位吉田松陰の遺文中より經世治國に關するものより時局論、感想記、愛情論、及び詩藻等を一冊に纏め一々原文に解釋を試み上欄に讀方を附して修養に資すると共に自習に便ならしむ

吉田松陰の遺文中立志修養の資とすべきもの若干を修養經世に分類して之に原文の字義讀方等の説明並に註釋を加へしもの既刊の兩修養訓と併せて修養に志す者の爲め好侶伴

□其他各新聞雜誌好評

■足立栗園先生著

偉人
修養
叢書

新井白石修養訓

■ポケット形天金
■洋綴全一冊
■定價金六十錢
■郵税金六錢

前人未
發の一
大識見
卓論處
世學の
教科書

文部省認定

新井白石は我儒林傳中傑出せる一人なり、其經學に於て其史學に於て學殖豐富なりしのみならず、之を政治、經濟、文學、教育等の實際に應用して効果を收めたれば、其文字今に於て之を看るも經世治國の上に參考すべく、又訓育上の資料とすべきなり、而も其苦學力行して朝散大夫筑後守たりし奮闘史は、亦後世の學ぶべき所とす本書は先生が著書を涉獵し其現代に資すべき文字を採萃し、之に訓釋を施したるものなれば一讀して彼の學殖識見を窺ふべく亦以て立志處世上の指針とすべきなり

●足立栗園先生編著

偉人
修養
叢書

伊藤仁齋修養訓

附 東涯修養訓

■ポケット形天金
■洋綴全一冊
■定價金六十錢
■郵税金六錢

滔々浮輕
に流るゝ
現社會の
一大警鐘

新刊

伊藤仁齋は近世の大儒なり、世教道德を振興維持するを以て任と爲し、吾人の日常生活上に簡易適切なる學說を唱ふ、海内靡然として之に應じ、堀川學營立つ、其子東涯博覽該通當時海法第一と稱せらる、父の家學を承けて之を祖述し、終に時古學をして學界の權威たらしむ、此篇正四位仁齋先生及び其子東涯の著書を遍く涉獵し、其修養上の見地を尋ね以て國民修養の指針たるのみならず、又以て漢文修習者の便に供す、素行、白石等の修養訓と併せ見ば、倍々獲る所多からん

■著生先園淇川皆■

實字解

本書は、天文、地理、衣飾、時令、宮室の各部門に分ちて各實字に就きては一々詳細なる解釋を施しあり漢文、國文の論なく讀書作文に缺くべからざる好參考書なり

■定價金六十錢
■郵税金六錢
■洋綴全一冊

■著生先園淇川皆■

助字詳解

本書の内容は假令は「又、復、亦」等の區別より常に用ふる類とは如何なる意味か寧の字は如何なる處に添ふべきかなど詳説せしものなれば讀書作文は勿論普通口語上にも必要なる參考書なり

■定價金參拾錢
■郵税金貳錢
■洋綴全一冊

讀書作文の羅針盤

著生先園淇川皆

虛字解

定價金五十錢
本書は虚字を五十音に分ちて索引に便し假令は(よの部)にある(よろこぶ)の部には歡、慶、喜、怡、悅、等網羅し一々夫々意味の區別を記す學問生諸君讀書作文には必備の書なり

郵税金六錢

法學士 南波空庵先生考案

薩摩
琵琶歌

圖式之曲譜

●●● 音福の者奏獨 ●●●



色特の書本

本書は、尤も新奇なる
解法を以て、一新音拔
高低(調子)發音の強弱
短等を抑揚的變化に及
尾の抑揚的變化に依り
し自在に吟詠し、依り
避いたるに在り、此は
眞實の味に在り、亦
授受の味に在り、亦
乞ふに在り、亦
空を速く、感興を遺れ
横絶せるの大感興を遺れ

石版赤色符入
四六形各輯全一册
各輯共一册定價四拾五錢
郵稅四錢

- 第一輯目次
 - 國城常武
 - 山丸野
 - 船石櫻
 - 錦大童
 - 御旗
- 第二輯目次
 - 別れの國
 - 河井
 - 櫻井
 - 繪島
- 第三輯目次
 - 廣瀬中
 - 王昭君
 - 七郎
 - 森昭君
- 第四輯目次
 - 野内
 - 野下
 - 花野
 - 若木
 - 春日
- 第五輯目次
 - 閉塞
 - 剛上
 - 政復
 - 政剛
 - 政復
- 第六輯目次
 - 旅順
 - 旅順
 - 旅順
 - 旅順
 - 旅順
- 第七輯目次
 - 小武
 - 武
 - 武
 - 武
 - 武

小林 鶯里 先生 著

趣味的
研究的

科學の天地

三六判洋綴美本 箱入全一冊 紙數七百餘頁 小正包 價金八一錢

雨は何うして降るかと問はれた場合その説明の満足に出
来る向は十人の内に幾人あるか?

學生諸君が學校に於ける科學的智識は何うであるか、家庭の奥様が愛兒に雨は何うして降るかと問はれた場合その説明の出来る向が十人に幾人ある、科學と云ふと大層六ヶ敷思ふが日常生活の上に科學に因らぬものは一つもない。その科學的説明を具體的に解釋したのが教科書以外にあらうか。本書は天地宇宙間の科學に就ての有らゆる問題を、極めて通俗的に、誰にも解るやうに面白く綴り、讀者に知らず識らず科學の知識を與ふると云ふ考案であつて、學生諸君が學校に於ての六ヶ敷科學の問題も奥様が愛兒の質問に對し、其の説明に苦しみつゝあるも一たび本書を繰れば満足なる回答を與ふることが出来る。要するに本書は科學的智識たり良師友たるものにて、苟くも天下の讀書子は先づ第一に本書を繰り而して他書を手にするを順序とす。

修養資料叢書

文農高 文學博 士橋 博學士 森五郎 鷗井 外敬加 先榮藤 生先兩 序生著

漂流奇談

ロビンソンクルーソー

文部省認定通俗圖書

朝日新聞批評

高橋五郎加藤教榮二氏の共譯なれば譯文の平易明快にして人心を動かす易きは言を待たざるべし從來に於て此譯本無きに非ざりしも今は多く坊間に見るを得ざるに至れり而も我が帝國臣民が海國男子として偉勳を策すべき時運は一日と熟しつゝあり此際於て此譯本の出でたるは大によし況んや此書が與ふる教訓獨り海島策勵の上のみに止まらずして國民精神の鍛鍊上に幾多の衝動を興ふべきをや。

四版裝幀頗美本約四百五十五頁 定價金十五錢 郵稅金六錢

徹底せる!! 活教訓書

文部省認定 無住法師原著 稻村露園先生編 新釋沙石集 (附榮根生活の妙味)

文部省認定 石上學人編 新白隱法語集

青年修養會編 一休法語集

青年修養會編 澤菴禪師教訓錄

安心

立命の鍵

本書は原著十卷中の精を萃めて輕淡なる文體となし其の悠然たる滑稽切實なる教訓趣味ある時代の信仰などを紹介したり。異彩ある教訓を得、特色ある趣を味はんとするものは本書を讀め

世に擴れる一休和尚の書概して其奇を賞して其眞意を解せず、本書は眞面目に一休和尚の奇言奇行を紹介して一言の詩禪にも註解を施したり

何事もをづるなく、をづれば仕損ふぞ、をづるは平生の事、場へ出てはをづるなく、をづるは平生の事、危しと思へばはまるぞ。五條の橋の上で乞食手を出して曰く、因果の道理にせめられ、斯るうき身を出し下されよ、これは因果はかなしきものに候と云ふ。大聖國師、諸人に下語せしむ、師代つて云く、何をそいどい舌を喜ばす者は心を苦しむ、塵事の紛利裡に活躍せんとするものは本書を讀め!!!

各册共 菊版半截形各一册 定價金貳拾五錢 郵稅各四錢

稻村露園先生著

世界偉人譚

文部省
認定済

絶好の講話資料

世界名作
お伽噺

稻村露園先生著

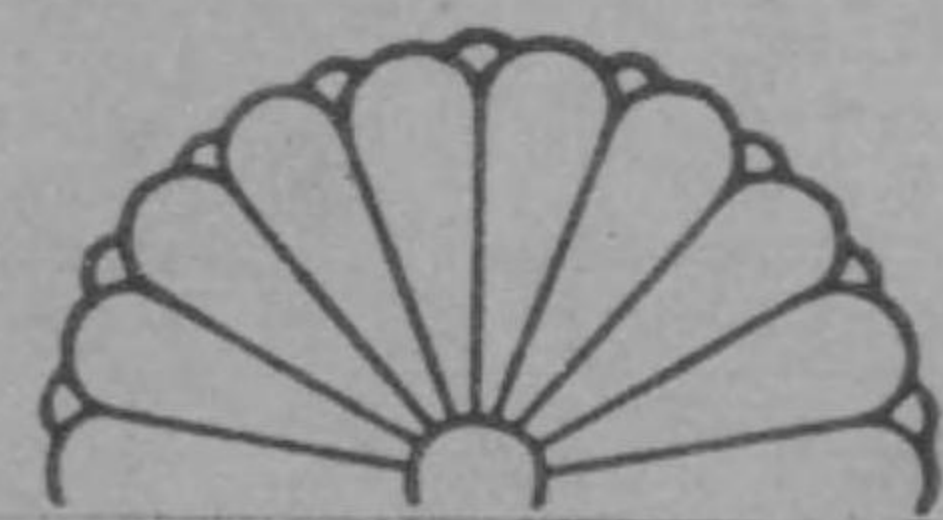
英雄知り易からず、されど英雄はわが益友。よしやおぼろげながらも彼を仰げば、之れによりて得る所無くむばあらじ彼は生ける光の泉なり世界の暗黒を照らす、彼は知識と剛毅と高貴の泉なり、誰か此のあたりに遺遺をぬがはざらんや。『世界偉人譚』は古往三千年來、滾々として盡きざる偉人英雄の生命と血と熱情の泉也、諸君來り、汲んで心の渴を醫やさずや!! 敢て諸君に一本を薦む

太郎さんは、お伽噺の御本は、何といふ名の本がよろしいかと先生に聞きました先生は文陽堂の『世界名作お伽噺』を買ひなさいと、しやいました。これは世界中の名作ばかりを集めたもので、日本の桃太郎や花咲爺は、元より世界中のおはなしが、此の一冊で残らずわかります、美しい繪が澤山あつて、製本が立派です。お伽噺の本もいろ／＼あるが、コンナニ面白く爲になる本はありませんサア、お讀みなさい

四定郵
六價稅
判各稅
裝各稅
幀金各
頗參金
美拾六
本錢錢



K 30



東京
文陽堂發行

355
19E

終

